

5. 道半ばのこと

● 研究系の再編と客員講座の戦略的な利用

- 13の研究系を5つに再編し、分野間の連携を強化
- 客員ポストの一定割合を所長裁量とし、ISASが戦略的に強化すべき領域に集中投資

● 大学連携拠点

- 京都大学に続いて、名古屋大学に拠点を設置し、ISASがこれをサポートすることで裾野を拡大

● ISAS科学推進部が国際化強化の活動を開始.

- ISAS科学推進部に「国際化推進チーム」が発足

目標：ISASがトップサイエンスセンター(TSC)の場であるため、世界の優秀な研究者が自由に集い、研究が活性化し、優れた成果を創出する「国際研究拠点」となるべくISASの国際化を推進する。

現状：国内トップサイエンス実施機関の調査、特に国際化の視点で実施すべき項目の抽出を進めている。

6. TSC構想の現状

● トップサイエンスセンター構想の意図を再確認し、具体的な施策に.

- 宇宙科学運営協議会 (ISAS運営に関するコミュニティ代表議論の場) にワーキンググループを設置
 - ✓ H25.2から議論を開始.
 - ✓ 目標として6月頃までに議論を終了.
 - ✓ 運営協議会で確認するとともに理工学委員会などコミュニティ全体の意識共有へ.

7. 課題

- 何故、これまでの議論が大きな具体的施策提案に結びついてこなかったか？

- 次期中期計画記載にある個別課題対応の施策だけで発展が望めるか？

- 逆に大きな施策を実施できたとき、

理念はよいが、具体的に動かした際に優れた研究者が来てくれるか？

国内研究者の流動化促進：人事制度、組織規定などの壁を越えることができるか？

宇宙研の受入体制は大丈夫か？

2012年のJAXA戦略会議宇宙科学分科会でも、宇宙研研究者に時間がとれない現状では、優れた研究者を招いてもインタラクションできないのではという疑問が出ていた。

「実験・ものづくり系」の研究者招聘の難しさがあるのでは？

理論研究者は場所の制限が少なく、研究の拠点を移動しやすい。日本でのみ実現できる理・工学プロジェクト、それにつながる研究が期待されるが、大型の設備利用を伴う優れた実験・開発系研究者をいかにし惹きつけるかが大きな課題。

- どういう形で実現を可能にできるか、実現するのが適当か？

8. 具体的な施策

再び、トップサイエンスセンター

国内外の大学研究者の総力を結集し、大学間・国際拠点間共同体を可能とする仕組みを新たに構築

- 予算, 人材(海外も含めた人材の流動化), 環境(サポートシステム構築)
 - ◆最先端の研究成果が持続的に創出される環境(研究者自身がこの場にいることで成長)
 - ◆世界に開かれた人材育成の場を整備(大きく育つ芽の議論が日常的に行われる環境)
 - ◆従来の研究分野の枠にとらわれない仕組みの整備(ダイナミックに活動できる場)

組織形態

課題の解決策を見いだした上で,

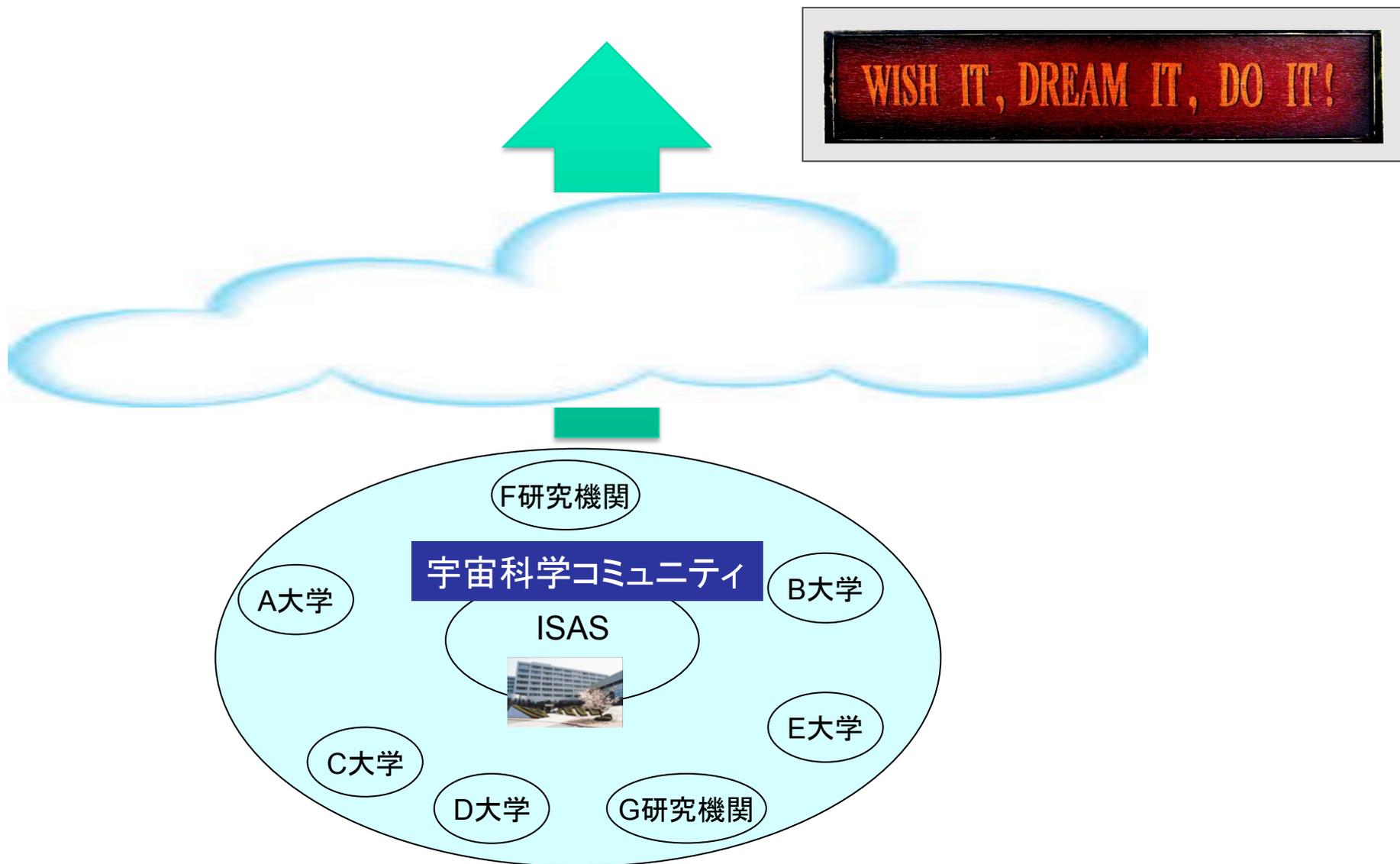
- トップレベル拠点申請(参考2)のイメージが1つの候補
- JAXAもしくはISASの中に「研究特区」を作るのも1つの候補
- 宇宙科学研究所自体を対象とするのも1つの候補

世界が羨むような
場を作ること

拠点で行われる研究の具体候補

- 理工学委員会の議論などによる

是非、この小委員会で具体化に向けた議論を進めて頂きたい。



トップサイエンスセンターに向けての取り組みの方向性

萌芽研究モジュール

新たなプロジェクトの核となる分野・領域の創出を目指し、JAXA内外に開かれた国際最先端研究組織を設置

大学連携協力拠点の強化

宇宙研外部のユニークな活動をエンカレッジし、大学側のリソースの活用を意図した研究モジュールを、大学連携拠点として設置

大学共同利用の仕組みを
発展させ、世界の
「トップサイエンスセンター」
を目指す

大学研究者の受入れ促進

受入れ障壁の軽減や流動化を促進するスキームの改善により、優れた大学研究者の時限的受入れ等を活性化

世界最高レベルの研究拠点

外国人客員教授の招聘、国際トップヤングフェロー制度の推進、大学連携協力拠点での優れた研究者の受入等、最高レベルの研究者の確保

IRISES提案(2007): 拠点の組織(運営)

宇宙理工学国際研究拠点(IRISES)はJAXAの独立組織(拠点長は専決権)

- ・研究者の処遇、任命は拠点長が専決
- ・研究者等は、IRISES拠点長と雇用契約を締結(評価に基づく年俸制)(JAXA派遣を除く。)

